

## 神の御手 エズラ 7:6-10

1. エズラはバビロンから上って来た者であるが、イスラエルの神、主が賜ったモーセの律法に通じている学者であった。彼の神、主の御手が彼の上にあったので、王は彼の願いをみなかなえた。(7:6)
  - a. ついにこの書の中心人物であるエズラが登場する。彼は伝統的に律法に通じているという点においてモーセの次に付く者であった。彼はまた祭司アロンの家系の者で、ここでは学者と呼ばれている。おそらくエズラから始まりこの学者と呼ばれる者たちは重要な人物となり、いずれはイスラエルのリーダーや「羊飼い」に取って代わる者となる。
  - b. エズラは律法を熱心に学んだだけでなく、バビロニアにおいて王と個人的に交流を持つなど政治の領域でも影響を持つ人物であった。どのようにしてエズラが王からそれほどの好意を得るようになったのかはわからないが、聖書は「主の御手が彼の上にあった」というている。
  - c. 最初のグループが神殿再建のためエルサレムに戻った時エズラはとどまったのだが、ついに彼が出発する時となった。これは想像でしかないが、おそらく彼も最初のグループに同行することを希望しつつ、主の御手が彼の上にあるのを待ってからバビロニアを出発したのであろう。
  - d. 私たちもクリスチャンとして個人的希望、外からのプレッシャー、また一見魅力的に見えるチャンスに心を揺り動かされないようにし、主の時を待ち主に従うことを学ばなければならない。私たちが生きていく中でもっとも大切なレッスンは心から主に信頼し従うことである。
2. エズラは王の第七年の第五の月にエルサレムに着いた。すなわち、彼は第一の月の一日にバビロンを出発して、第五の月の一日にエルサレムに着いた。彼の神の恵みの御手が確かに彼の上にあった。(7:8-9)
  - a. 11-26節に見られるようにアルタシャスタ王はエズラがエルサレムに戻り主の家をきよめるため、望むものすべてを与え特別な恩恵を与えた。しかし王のすべての好意を受け入れる前にエズラはまず全能の神に、ペルシャ帝国から守られることよりも、神の御手がエルサレムに帰る民を守ってくださるように祈る(8:21-23)。
  - b. 彼らは権力によるのも馬車や馬の力によるのでもなく、神の御手に守られエルサレムに到着した。
  - c. エズラ自身も神の守りに信頼する時に困難を覚え奮い立つ必要があった(28節)。私たちもそのような生き方をする時、神の御手があっても超自然的な勇気が必要な時がある。
3. エズラは、主の律法を調べ、これを実行し、イスラエルでおきてと定めを教えようとして、心を定めていたからである。(7:10)
  - a. 私たちが聖書の律法や様々な出来事を学ぶと、神の真実さを繰り返し教えられる。神はつねに真実さを表してくださる、ということをつねに心に留めておくことは私たちにとって良いレッスンである。信仰生活を送るうえで、私たちの生活の中につねに全能の神の御手が働いておられるということを忘れてはならない。
  - b. エズラは神の御言葉を学んだだけでなくそれを人生のゴールとし、また人に教えた。神の御言葉をただ知ることと、これを実行することとは全く別のことである。
  - c. エズラは、彼が仕えた神のことを知りたいと飢え渴く人々に、神の御言葉を明確に表現し、忠実に伝える人生を送った。